

報告(1)

「対人支援における〈学＝実〉連環型研究の方法論」



松田 亮三

(産業社会学部教授・人間科学研究所所長)

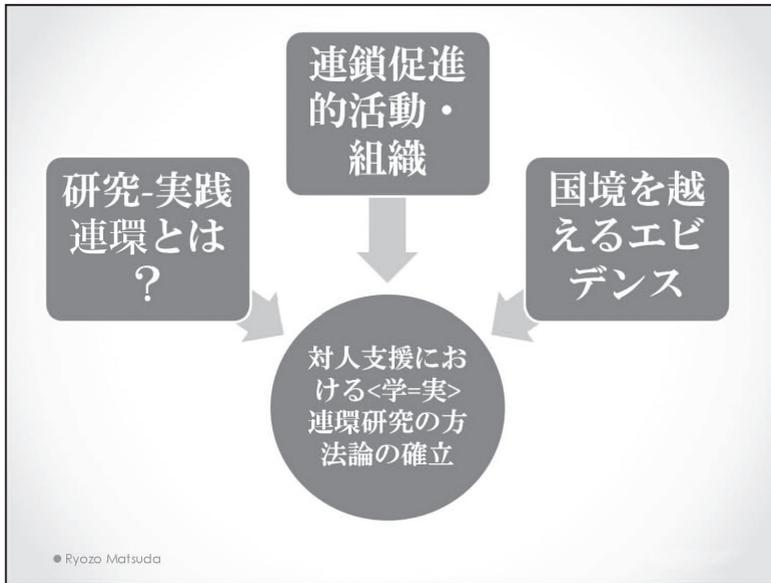
先ほどまで司会をしていました研究所長の松田です。所長の仕事はマネジメントということになりますが、その一つにプロジェクトの発足というものもあると考えておまして、このプロジェクトの立ち上げに関してトランスレーショナル研究という医学分野で先行している研究を対人領域で生かすというアイデアと、それから先ほど稲葉先生が述べられましたが、修復的・予見的・伴走的支援という新しい分類、この言葉自体は使われていたんですが、この新しい分類を用いてプロジェクトを構築するという構想について、貢献できたのではないかと考えています。

学術と実践の緊密な結合は、今、対人支援の課題が非常に複雑化して大きな課題が突きつけられる中で、ますます重要になってきていると思っています。この背景にある社会の背景は言いつくせないほどあるわけですが、様々な新しい課題に心理学や社会学といったようなディシプリンの明確な学問や応用的な側面があるソーシャルワークや社会福祉という諸科学がいかに取り組んでいくかが、学術研究の役割への社会的関心が高まっている中で非常に重要だと考えています。

方法論チームの話に移りますと、諸科学の成果を対人支援の実践に意識的にまた体系的に結び付けていくという方法論、これを対人支援領域におけるトランスレーショナル研究のあり方ととらえて、総合的に追求していきたいと考えております。ここで、方法論というのは、実際にどなたかの援助をするということを直接検討するというよりは、援助のための研究を横目で見て、どのようにして実践をエビデンスにつなげていけるのか、それからどうしたら新しいエビデンスを普及できるのか、こういうことを考えるということです。

研究体制は私に加えて心理学の方法論に詳しいサトウタツヤ先生が中核となり、そして実践的研究と結びつけるために、他のグループのリーダーにも参加いただき、ポストドクトラルフェローと大学院生が研究を進展する機動力とな

るというものになっています。



このスライドにありますように、三つ大きな目標あるいは研究分野を考えています。一つは対人支援領域において基礎と実践を連関させる過程はどのようなものなのか。諸学の基礎的な成果と対人支援実践をつなぐ研究の鎖はどのようなものなのか。どういうつながりで、新しい知見が繋がっていったって、実際のサービスの改善までに至っているのかということを中心とします。

これを研究するためには実際に進められている研究と連携していることが、個別具体的な研究と連携して行くことが大事でして、例えば「引きこもり」の方の支援とか特別支援教育での新しい手法や概念がどう普及したか、こういうことを分析していきたいと思っています。また近年発達しています脳研究などの生物医学的手法を用いた研究がどう対人支援と結びついているのかということも考えてみたいと思っています。

二つ目の課題は、対人支援における研究の連鎖の実態を踏まえて、より組織的、体系的、効果的に連鎖を促進するための方法論を作っていくということです。こういったために必要な活動、組織制度がどのようなものなのか、対人支援の場面でどうかということを考えてみたいと思います。特に今日の基調講演で触れられましたエビデンスの総合と普及ということについても、対人支援

領域に引き寄せて検討したいと思っています。キャンベル共同計画も日本で取り組まれていますけれども、もっと進めて行くためにはどうしたらいいのかということも考えてみたいですし、特に実践的知識の普及について情報通信技術を用いた普及の方法、新しいメディアを使った普及の方法にも取り組んでいきたいと考えております。

三つ目の課題は、対人支援のエビデンスが、国境、あるいは文化の壁を超えられるかという問題です。今日の世界では多くの国が似通った対人支援の課題に直面しています。この中である文化圏で試された支援の方法が異なる文化圏で活用できるのかどうか。活用できるとすれば、何に注意してどのように活用しなければならないかということについて考えてみたいと思っています。このテーマは非常に大きなものですが、日本、アジア諸国における新しい支援法の伝播や普及の課題を検討したいと考えています。

今日、ソイダン先生のお話をうかがって、あるいはもう少し、志高く北米の知見をどのように取り入れているかということについても考えてもいいかなと考えました。ただアジアの文化的共通性の中での移転という問題と、北米、ヨーロッパと日本というのでは考えることも違うかもしれません。そのようなことにも意識して研究を進めたいと思っています。

実際に我々の研究グループの中では、今現実に進められている研究としてはアジアの中での共同研究が多いということで、その共同研究がどのように進められているのか、テレビ会議でどのように話をされているのかということも、できれば見せていただいて、それを方法論から検討するということを進めたいと思っています。

以上のべたように、今日は構想だけで申し訳ないんですが、今年度の検討をふまえて、次年度から本格的に進められるように準備を進めたいと思っています。

医学分野では、トランスレーショナル研究というのは、薬の開発を中心にかなり議論が進んでいますが、そこで言われている議論も批判的に摂取しながら、対人支援分野でのトランスレーショナル研究を確立できるように頑張っていきたいと思っています。以上です。

稲葉 松田先生、どうもありがとうございました。それでは次に社会的包摂に向けた予見的支援の研究について、このテーマについて文学部の土田宣明先生

にご説明いただきたいと思います。よろしく申し上げます。